

令和6年度（今年度）の学校評価

本年度の重点目標	①安全で安心な学校づくり ②教育活動の充実と授業改善 ③教職員の多忙化・多忙感解消		
項目(担当)	重点目標	具体的方策	留意事項
幼稚部	①家庭との連携の充実	・保護者への丁寧な説明を行う。	・学校と家庭が連携して指導の効果を高める。
	②幼児同士のやりとりの増加	・やりとりのある活動を設定する。	・やりとりに必要な語彙の指導を日々行う。
	③活動内容の精選	・指導目標を明確にして、内容を検討する。	・ゆとりのある活動内容で、幼児の確実な成長を目指す。
小学部	①学校生活のきまりの定着	・事前の説明、称賛、促しを行い、家庭とも連携する。	・部内や他部と情報共有を行い、チームとして指導を行う。
	②正しい実態把握と適切な課題設定	・客観性のある実態把握を行う。	・課題設定が適切となるように実態と比較する。
	③スムーズな会議の運営	・グループウェア等を活用し、事前に協議を済ませる。	・状況を把握し、事前の協議を促し、部会で決定できるようにする。
中学部	①落ち着いた生活態度の育成	・規律を守る啓発や環境整備を行う。	・学校や家庭での様子を共有し、実態に即した手だてを講じる。
	②主体的に学習する生徒の育成	・教材や掲示を工夫し、生徒が分かる授業を行う。	・生徒の気持ちに寄り添いながら、目標や課題への意識を促す。
	③風通しのよい職場づくり	・指導や支援の困り感を共有し、協力体制を築く。	・普段から相談しやすい雰囲気づくりをする。
高等部	①関係機関との連携	・校内外で連携をとり、個々の職員や関係機関の専門性を有効に活用する。	・必要に応じて、生徒や保護者に関係機関の情報提供を行う。
	②進路実現を目指した授業づくり	・進路実現のための授業づくりと授業力向上のための研修に取り組む。	・進路指導主事を中心として必要な進路情報を集約し、部で共有する。
	③教職員間の情報の共有	・学年や教科内で教材や必要な情報の場所を決め、精選・分類する。	・個人情報の取り扱いに留意して情報共有を行う。
総務部	①開かれた学校の推進	・定期的に掲示物を確認し、掲示物の内容の更新を適宜行う。	・行事写真等を適宜掲示し、最新の学校の状況が伝わるようにする。
教務部	②授業の充実・改善	・授業チェックシートの活用と児童生徒が学びを振り返る機会を設ける。	・さまざまな授業の取組について情報交換を密にしたり、授業の振り返りを基に改善のための手だてを話し合う機会を設けたりする。
生徒指導部	①いじめ問題に対する組織的な対応の確立	・いじめ不登校対策委員会で、いじめや不登校に関わる問題を全体で共有し、指導方法等を検討する。	・年度末に開かれるいじめ不登校対策委員会では、本校でいじめが起きた事案を再度確認し、次年度の指導につなげられるようにする。
保健体育部	①主体的にけがや病気を予防・対処できる子どもの育成	・集団指導に加え、日頃から個々に合った個別指導を充実させる。	・個別指導を的確に行うため、普段の学校生活、クラスでの様子、家庭での様子等の把握に努める。そのために担任や保護者との情報交換等を大切にする。

進路・ 地域支援部	② キャリア教育の推進	・先輩の話を聞く会や卒業生の話を聞く会、児童会と生徒会の交流、部を超えた授業交流、交流プラザでの交流を活用して、自分の将来像をイメージできるようにする。	・より充実した交流になるように、事前、事後に他部や他分掌と情報共有の場を設ける。
自立活動・ 研修部	②正しい日本語の読み書きの力の育成	・日記、コラム学習、作文など文を書く機会を数多く設定し、指導方法の工夫を各部や研究グループで検討し、日本語の読み書きの指導に取り組んでいく。	・各部での具体的な取組を部内で共有するとともに、他部との合同の研修など情報共有の場を設け、連続性のある指導につなげる。
寮務部	①笑顔あふれる安全で安心な寄宿舍づくり	・係活動や舎生会、行事等を通して舎生の実態を丁寧に把握し、一人一人の心身の発達に寄り添った支援と指導を実践する。	・個々の目標や課題を指導員全体で共有し、日常生活や集団生活の中で連携して指導、支援する。
学校関係者評価を実施する 主な評価項目	①防災、防犯、感染症対策、美化など、安全で安心な学校づくりのため環境整備がなされている。 ②正しい日本語の読み書きの力を身に付させるための適切な教育活動が営まれている。 ③教職員間で情報が共有される風通しのよい職場づくりが図られ、教職員の多忙化・多忙感解消のための方策がとられている。		

令和5年度（昨年度）の学校評価

<p>本年度の 重点目標</p>	<p>① 開かれた学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報発信：HPのさらなる活用 ブログの充実 新聞やテレビ、広報誌等の活用 等 ・保護者との連携：全校懇談会 部別懇談会 個人懇談 授業参観 P T A活動 等 ・地域、外部との連携：学校関係者評価委員会 手話講習会 体験交流 交流プラザ 研修プラザ 等 ・教職員間の情報の共有化：風通しのよい職場づくり（内に開かれた学校） <p>② 教育活動の一層の充実と授業改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の充実（授業検討会の実施 授業チェックシートの活用 I C T機器の効果的な使用方法の研究 等） ・P D C AサイクルのC〔評価〕、特に外部評価を踏まえたA〔改善〕 ・地域、外部との連携（ペンタゴン交流 筑波技術大学との高大連携授業 学校間交流 居住地校交流 自然体験活動 出前授業 等） <p>③ 正しい日本語の読み書きの力を身に付けた幼児児童生徒の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・口話と手話を併用する学校における、日本語の読み書き能力を高めるための指導方法の研究 ・読書環境のさらなる充実（図書館の整備 貸出し図書の実施 本の読み聞かせ、朝の読書の実施 等） <p>④ 教職員の多忙化解消に向けての業務改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施錠時間、定時退校日の徹底 校務支援システムの活用 書類の簡略化、ペーパーレス化 会議等の工夫 等 ・ライフワークバランスのよい働き方の実現〔達成目標：残業45時間未満／月 年次休暇取得7日以上／年〕 		
<p>項目 (担当)</p>	<p>重点目標</p>	<p>具体的方策</p>	<p>評価結果と課題</p>
<p>幼稚部</p>	<p>友達や教員と楽しくやりとりをしながら、日本語の基礎を身に付ける。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・発表や活動の振り返り、自由遊びや集団遊びの機会など、幼児同士が共通の話題でやりとりできる場を毎日設定する。 ・年齢や発達段階に合わせて、口声（口形）模倣を促したり文字を提示したりしながら、日本語の音韻意識を育てていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の会での体調確認、絵日記発表での質疑応答、クイズの出題などの取組、縦割り活動で異学年のペアやグループでの活動の積み重ねなどによって、徐々に幼児同士がやりとりする姿が多く見られるようになった。 ・視覚支援教材と文字を併せて提示したこと、文字を見せて口声模倣を促したことなどによって、音韻など日本語への意識が高まり、保護者アンケートで昨年度「そう思う」と答えた保護者が5、6割だったが今年度は6、7割に増加した。 ・各アンケート項目で「あまりそう思わない」、「わからない」と答えた保護者がいたことから、指導の目的、成果、家庭での具体的な活用方法などを丁寧に説明し、幼児の実態に合った指導の改善を継続して行う。
<p>小学部</p>	<p>児童がともに学び合う授業を展開し、基礎学力の向上を図る</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・目当てを明示して授業を進め、ポイントとなる点をまとめとして伝える。 ・友達の意見に対する考えを述べる機会を設定する。 ・助詞や文法の違いによって文の意味が異なることを図で表して理解を促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の重要なポイントを絞って伝え、考え方を視覚的かつ段階的に提示することで、計算方法などの基本的な学習に取り組むことができた。保護者アンケートでは、宿題への取組で成果が見られたため、学校や家庭で継続することが課題である。 ・自分の考えを伝える際のキーワードを示すとともにできた児童を称賛することで、自信をもって発表することができた。 ・助詞や文法の違いについて、学習課題が似ている児童同士でのグループ分けや視覚的な情報提示をすることで、語彙力を向上させるための学習に取り組むことができた。

<p>中学部</p>	<p>中学生としての自覚を促し、学びの態度と学力の向上を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業規律を重視し、生徒にとって楽しく分かる授業を行う。 ・生徒の実態に合わせた指導を心がけ、学力の向上を目指す。 ・課題の取組方を具体的に指導し、家庭学習の習慣化を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研究とタイアップし積極的にICTを活用するなど、実態に合わせて授業を分かりやすく行うことができた。今後も生徒の意欲を高めるように工夫することで、集中力の向上やメリハリを付けて授業に臨む態度へつなげていく。 ・生徒の実態を考慮して指導体制や支援を工夫することで、個に応じて安定した学習を進めることができた。また、生徒の気持ちに寄り添い、部内で指導方法の共有や協力をしながら個々の学習環境を整えていくことができた。 ・保護者アンケートの結果等より家庭学習での主体性を引き出すことは難しかった。実態に応じた課題の見直しや生徒へ家庭学習を含めた学習の定着化を促すことが課題である。
<p>高等部</p>	<p>卒業後の生活を見据えた学力の向上を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・分かる授業を展開するための授業力の向上を図る。 ・個々の生徒の実態を踏まえた適切な家庭課題を提示する。 ・締切を明示したり、声掛けを行ったりして課題が継続して行えるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器の効果的な活用だけでなく、板書やプリント教材とのバランスや使い分けを意識した授業研修を行うことができた。 ・生徒の中には、考査に向けて意欲的に学習したり、検定に積極的に挑戦したりするなど学習姿勢の改善が見られた。しかし、保護者アンケート結果では、20%が学習や検定試験に向けた取組状況の評価がよくなかったと考えている。この評価を上げることが目指したい。 ・進路実現に向けて、各々の生徒が自分に必要な学習を理解し、自分に合った学習方法を試行錯誤しながら身に付けられるようにすることが課題である。卒業後も役立つ「生きる力」として能動的な学習が行えるように、引き続き生徒の進路や実態に合わせた学習指導や家庭学習の質的量的改善を図っていく。
<p>教務部</p>	<p>学力の定着や日本語力の向上を目指して、幼児児童生徒が分かる授業を展開する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の目標を明示し、まとめを文章で書く活動を行う。 ・授業検討会を実施したり、授業チェックシートを活用したりする。 ・ICT機器やデジタル教材を活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの教員が、授業の目標を明確にし、視覚教材やICTを活用するなど、分かりやすさを意識した授業を行うことができた。特に、ICTの活用では、研修や各部の授業での取り組みの情報共有などにより、今後の活用に向けての研鑽を積むことができた。また、授業検討会を1回実施、授業チェックシートを1～3回活用することで、自分の授業で足りなかった点を明らかにし、改善の意識を高めることにつながった。今後も、授業の目標や幼児児童生徒の身に付けたい力に合わせて、ICT、板書、筆記を効果的に活用する授業を行っていく。 ・保護者アンケートの結果より、まだ授業の様子が保護者に十分に伝わっていなかったり、幼児児童生徒から理解されていると感じられていなかったりしている様子がうかがえた。今後も、授業内容について保護者に分かりやすく伝える機会を設けるように考えていく。
<p>生徒指導部</p>	<p>いじめ防止に関する啓発活動を充実させ、思いやりのある人間関係の育成を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめ不登校対策委員会の定期実施によって、全校の課題を教職員間でしっかりと共有し、指導に生かす。 ・定期的なアンケート調査を 	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめや不登校に関わる内容を特定の教員だけが抱え込むことがないように、いじめ不登校対策委員会を開き、情報を全体で共有することができた。また、事案に応じて委員会のメンバーを柔軟に構成し、適切な

		<p>実施し、いじめの早期発見、迅速的な対応ができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒会・児童会の啓発活動を充実させ、いじめ防止に努める。 	<p>対応ができるように進めることができた。実際にトラブルが起きたときに、迅速に対応し、一つ一つの事実確認を明確にすることが課題である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活アンケート調査は、子どもたちの悩み等を把握する手段として有効であった。また、アンケートを基に個別相談を実施することで、いじめの未然防止、早期発見に役立てることができた。 ・児童会・生徒会によるいじめ防止スローガンの募集では、各部から多くの作品が集まり、いじめ防止について意識を高める機会となった。
保健 体育部	<p>自らの健康・安全に関心をもち、主体的に予防・対処できる幼児児童生徒を育成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・集団指導に加え、日頃から個々に合った個別指導を充実させる。 ・連絡帳やお便りを使って家庭との連携を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナが第5類になったが、引き続き感染症対策は気を緩めることなく継続して行った。流行時には声掛けや指導を強化した。安全に対しては保健だよりなどを活用して啓発を行った。 ・教職員と保護者へのアンケート結果から、教職員は健康・安全について常日頃から児童生徒に個々にあった指導をしているが、保護者へは伝わっていないようで、教職員と保護者とのギャップあった。家庭への連絡・連携の手段の検討が必要である。 ・集会や養護教諭、栄養教諭による単発的な授業だけでなく、担任や教科担任と連携を深め、発信している情報を実践できるようにする継続的な指導、支援をしていく。また、保健だよりや食育だよりを活用した保健の授業などの勧奨やブログでの発信を増やしていきたい。
進路・ 地域支援部	<p>幼児児童生徒の社会的・職業的自立を目指したキャリア教育を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語力や規範意識は、将来につながる力であることを他の分掌と協力して幼児児童生徒だけでなく、家庭にも説明し、幼児児童生徒たちの活動につなげて取り組む。 ・キャリア教育全体計画を教員間で共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度に続いて、今年度も他の分掌と協力して取組を行ったが、呼びかけが足りず保護者・教員ともにそれぞれの分掌単体の取組として受け取られた部分もあった。しかし、日本語力や規範意識は、将来につながる力だとイメージしやすいため、幼児児童生徒だけでなく、家庭にも説明して日々の生活で指導することができた。 ・保護者アンケートから、子どもの行動の変容がないと感じている保護者もいる。今後も他の分掌と協力していくとともに、長期的スパンでキャリア教育について考えてもらうように家庭と連携して取り組んでいく。
自立活動・ 研修部	<p>豊教育の専門性を高める研修の充実に努め、幼児児童生徒の正しい日本語の読み書きの力の向上を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日記・コラム学習、作文など文を書く機会を数多く設定し、文を書くことを楽しめる工夫を各部で検討し、取り入れていく。その中で、助詞を含めた日本語の読み書きの指導に取り組んでいく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日記・コラム学習、作文指導など文を書く機会を多く設定し、読み書きの指導に取り組むことができた。研究グループと連携して、児童生徒の書くことへの意識のアンケートをとり、書くことへの意欲がわく題材や自立活動の授業展開を検討したことをさらに部全体、学校全体へ広げていく。 ・保護者のアンケート結果より、書くことへの基盤作りや書くことを多く設定して指導に取り組んでいることは評価された。しかし、提示する言葉や書き方の指導が十分ではない、はっきりとした読み書きの力の向上を感じていない保護者もいる。今後も、日記やコラム学習、作文の指導の取組について研究・研修で情報を共有しながら取り組んでいく。

寮務部	互いに認め合い、協力し合ってよりよい寄宿舎生活を送る態度を育てる。	<ul style="list-style-type: none"> ・寄宿舎での行事や日頃の生活について、舎生が中心となって話し合い、意見をまとめたり、報告をしたりする機会を設ける。 ・家庭や学級担任との連携を密にし、つながりのある指導を心がける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行事では、生徒同士で意見を出し合ったり、工夫して運営したりすることができた。普段の生活も落ち着いていた。話し合いで寄宿舎のテーマを決めたことが生活に生かされた。しかし、舎生会の話し合いの場面では、提案者が、役員に進行を任せてしまうことがあった。提案者が最後まで関わり、責任を持ち議論を深められるような指導や支援を工夫していく。 ・今後、舎生数が減少することが予測される。一人一人が自治活動にどのように関わっていくか、また自治に関わる気持ちをどのように高めていくかなど、舎生の実態に合わせながら運営方法の工夫を検討していく。 ・学校での指導内容を寄宿舎でも全舎生に向けて改めて確認するなど連携してつながりのある指導ができた。
総合評価	<p>①開かれた学校づくりを推進するために、学校ブログや新聞等のメディアの活用により積極的な情報発信をすることができた。また、夏季休業中に交流プラザ（地域の小中学校の児童生徒の交流会）や研修プラザ（小中学校等の先生向けの研修会）を実施し、地域・外部との連携を図ることができた。</p> <p>②授業検討会の実施、授業チェックシートの活用を通して、教員一人一人が、自分の授業の振り返り、授業改善を進めることができた。また、ICT機器の効果的な活用に向けての研鑽を積むことで、分かりやすさを意識した授業づくりに努めることができた。</p> <p>③幼児児童生徒の正しい日本語の読み書きの力の向上を図るために、文を書く機会を多く設定し、読み書きの指導に取り組むことができた。また、図書館の整備、貸出図書の実を充実させることで、読書環境を更に充実させることができた。</p> <p>④、会議・起案の流れの整理、職員会議の書面開催や会議時間の短縮、保護者通知のペーパーレスなどを行うことができた。また、教職員からの校務削減の意見を集約し改善策を講ずることで、学校業務の改善と効率化を進めることができた。</p>		